

あけましておめでとうございます

旧年中は大変お世話になり心より御礼申し上げます。

昨年は北海道命名150年、弊社も創立45周年として記念すべきスタートを切りましたが、7月の豪雨、9月の胆振東部地震と連続して大災害に見舞われ、記念と試練が錯綜する目まぐるしい一年となりました。被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げるとともに、引き続き現地調査や各種検討を通じ微力ながら復興の一助となれるよう全力で取り組む所存です。

さて、平成時代が幕を閉じようとしています。私事、高校、大学、新卒(異業種)、業界入り、道外外向、そして5年前の代表就任とたくさんの経験を積ませていただいた貴重な年月でした。それに伴い弊社も私も46歳。人間、気力は続けど体は否応なしに老いるものですが、幸い企業や組織はやり方一つでいつまでも若さや勢いを保てるものです。いつまでも青年企業であるために、常にアンテナを張り新しい技術や手法を貪欲に取り入れ前向きにチャレンジしてまいります。

そして、人口減少・超高齢化社会、人手不足などネガティブな要素はあれど、東京五輪、大阪万博、新幹線札幌開業、そして札幌冬季五輪へ繋がることで明るくワクワクする時代が来ることを願って止みません。

今年は消費増税、統一地方選、参院選、そして国土強靱化に向けた集中政策が出される1年目となり、主要なインフラ点検も5年サイクルが一巡し、今年から二巡目となります。働き方改革もいよいよ本格的に運用が始まり、元号改定だけではない大きな節目の年となるでしょう。それらの外部環境をチャンスと捉え、社員一人一人がイキイキと活躍できる環境を整えることで様々な施策に柔軟に対応できるようこれまで以上に技術力、組織力を高めてまいります。

また、異常気象が通常気象となりつつある昨今、いかなる事態にも確実に事業を継続し、皆様のご要望に迅速かつ適切に対応できるよう努力を重ねてまいります。

本年も変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

株式会社エーティック
代表取締役社長 舟田 幸太郎



CONTENTS

- エーティック創立45周年記念事業
- 下期安全大会 ● 植樹活動
- 社内技術発表会 特別講演
- 土木技術者列伝 第2回 吉町太郎 (文)井形淳
- 道内トンネル文献あれこれ ● 計測グループが生まれ変わります! ● 対外発表
- 技術者コラム 第6回「白い雲の浮かぶ青い空」 (文)志部谷一男
- 北海道胆振東部地震 ● 函館支店開所式 ● UAV飛行許可承認

株式会社エーティック 45周年記念事業 札幌市へ時計塔を寄贈いたしました

弊社はおかげさまで平成30年に創立45周年を迎えました。

その記念事業として札幌市中央区にある、円山公園内パークセンター近くに時計塔と掲示板を設置し、札幌市に寄贈いたしました。時計塔は高さ4.0m、幅0.7mで、おおきな時計盤とデジタル温度計を設置、その両脇に地域の掲示板を配した機能的なデザインとなっています。掲示板は既存の老朽化にともない、この度の時計塔新設に併せて更新いたしました。掲示板には公園からのお知らせや、円山小学校の児童による絵画などの作品も掲示できるようになっています。設置された時計塔は、8月11日の「円山公園こども夏まつり」で御披露目されました。式典のあいさつで、舟田幸太郎社長は「創立45周年は市民の皆様の支えがあったからこそ。この地域で五十年、百年企業を目指していきたい。」と決意表明をいたしました。そのあと、舟田社長、舟田清志会長、吉岡亨副市長様、添田伸一みどりの推進部長様、円山小学校の児童代表4名と共に除幕をし、集まった地域の皆さんの歓声と拍手を受けて、新たなシンボルとして時を刻み始めました。

また、夏まつりの緑日にも弊社社員20名ほどを動員し、輪投げコーナーを設置。来場した皆様楽しんでいただこうと奮闘いたしました。地域の皆様と触れ合える機会をいただき、更には札幌市からの感謝状を副市長様よりいただくことができ、これからのエーティックにエールをいただいた一日でした。



安全大会-安全意識の向上を

9月27日札幌市生涯学習センター「ちえりあ」にて平成30年度下期安全大会を開催しました。

協力会社を含む役員が90名が参加。舟田幸太郎社長は北海道胆振東部地震における緊急対応の協力を感謝を述べ、緊急対応が続く中ではあるが、焦らずまずは現場までの交通安全と現場での安全を心掛け、より気持ちを引き締めるよう呼びかけました。このあと日本自動車連盟札幌支部事業課の山本洋平交通環境係長を講師に招き、交通安全教育が行われました。また、安全衛生活動報告では事故発生時の対応や現場作業別の安全手順について霜出安全衛生委員長が説明を行い、最後に参加者代表が安全決意を表明し、下期においても安全最優先での行動に努めることを全員で確認しました。

株式会社エーティック 下期安全大会



植樹活動-今年度で十年目



9月1日、当別町と月形町にまたがる道民の森で、毎年恒例の植樹ボランティアを実施しました。

地域密着型の社会貢献活動として開催しているこの取組も節目の10年目を迎えました。当日は快晴の空の下、役員とその家族ら21名が参加。ミズナラやヤチダモの苗木120本を1本1本丁寧に植え込みました。

土曜日ということで子供連れで参加する社員もあり、額に汗をにじませ作業を行った後は、全員でバーベキューを楽しみ、充実した週末のひとときを過ごしました。



平成30年度 第26回 社内技術発表会特別講演

平成30年9月27日に毎年恒例の社内技術発表会が宮の沢の「ちえりあ」大研修室で開催されました。社員による技術発表5編の他に、お二人の講師に特別講演をしていただきました。

一つ目の特別講演は、北海道大学大学院農学研究院の中村太士教授による「人口減少・気候変動をどう乗り切るか：グリーンインフラ」という演題で、人口減少・気候変動という日本が直面する大きな課題に対する対応策の一つとして、グリーンインフラ(GI)という概念について、主に防災・減災、生物多様性保全、そしてこれらを発展させた地域づくりの側面から、多くの事例を交えてお話いただきました。

グリーンインフラとは、自然環境がもともと有する多様な機能を積極的に活用することで、地域の魅力、居住環境の向上や防災・減災等の多様な効果を得ようとする考え方で。

日本においては政府の国土形成計画、国土利用計画の両方に記述され、平成27年の社会資本整備重点計画にも盛り込まれ、まさにこれから本格的な取り組みが期待されます。

日本が直面する状況としては、急激な人口減少による過疎化が進行し、一方で北海道でも近年台風災害が目立って発生するようになり、西日本では昨年甚大な豪雨災害が発生したように、気候温暖化の影響による想定外の災害の発生が懸念されるようになっています。中村教授のご講演からは、既存の制度や概念ではこれらの環境変化に対応できず、その打開策の一つとしてグリーンインフラがあることが理解できました。

防災・減災の側面では、既存インフラ(グレーインフラ)とGIは対立するものではなく、それらを組み合わせることで互いの機能を補完し、計画規模以上の災害にも一定の安全度を確保するハイブリッドインフラ(HBI)の考え方や、原形復旧ではなくHBIを組み込んだ未来復興の思想が必要だというお話が大変印象的でした。

また中村教授の研究では、洪水調整施設としてのGIである遊水地が、生物多様性保全機能を発揮していることを、千歳川の舞鶴遊水地などを事例として紹介して頂きました。舞鶴遊水地ではタンチョウの飛来も確認できるようになり、GIとしての遊水

地が地域活性化の基盤として期待されているとのことです。

我々は、建設コンサルタント技術者として日ごろインフラと関わる中で兎角日々の業務に追われて視野が狭くなりがちですが、少し立ち止まってインフラを取り巻く環境を見渡し、これからの進むべき方向性を考えさせられるご講演内容だったと思います。

二つ目の特別講演は、泰進建設株式会社執行役員の小森一澄氏に「建設コンサルタント技術者に向けて」という演題で、講演していただきました。

小森氏は昨年度まで北海道開発局室蘭開発建設部室蘭道路事務所長を務められ、これまで北海道開発局の数々の要職を歴任されてきました。講演ではそのご経験から、建設業界の現状、北海道開発局の業務成果品質向上の取り組み、我々コンサルタント技術者が業務に取り組む際の留意点、業務改善への提案などについて、お話いただきました。

豊富なご経験による業務の取り組み姿勢や留意点に関するお話は、大変重要な内容ばかりで、業務成果品質の重要性や、業務取り組みには「段取り八分、スケジュール管理が重要」という指摘は、今後の業務で常に心掛けねばならない点だと思います。

技術向上委員会技術研修部会長 菊山 浩喜



講演者



中村 太士氏

北海道大学大学院農学研究院 森林生態系管理学研究室 教授

略歴

国際誌 Geomorphology, Earth Surface Processes and Landforms, Oxford Bibliographies (Oxford University Press) などの編集委員、日本森林学会会長、日本生態学会代議員、応用生態学会副会長などを歴任する。中央環境審議会、国土審議会、社会資本整備審議会委員、釧路湿原自然再生協議会会長を務める。平成17年日本森林学会賞、平成21年生態学琵琶湖賞、平成23年尾瀬賞、平成24年みどりの学術賞、平成25年北海道大学研究総長賞、平成29年日本農学賞、読売農学賞、平成30年北海道科学技術賞、紫綬褒章受賞(章)



小森 一澄氏

株式会社泰進建設 執行役員

略歴

昭和52年4月北海道開発局に入局。釧路・留萌・札幌・小樽・室蘭・本局・旭川に勤務。国道の改築事業、維持管理を担当。平成30年4月 室蘭道路事務所長を最後に退職。平成30年6月 株式会社泰進建設に入社



第26回 平成30年度 社内技術発表会



吉町 太郎一

井形 淳

吉町太郎一(よしまちたろういち)は明治中期に東京大学と海外留学で橋梁理論を学び、後の橋梁理論の構築と発展に大きな足跡を残しています。その集大成ともいべき著書が「鋼橋の理論と計算(1952年)」です。全国の各大学では工学部創設に係り、教鞭を取る傍ら、教育行政の立場からも学部の基盤づくりに尽力し、さらに各地の橋梁建設に携わりました。代表的な功績として旭川市のシンボル、旭橋が挙げられます。研究者・教育者・設計者とそれぞれ違う立場で三面六臂の貢献を果たした橋梁界の偉人なのです。

吉町太郎一の足跡

吉町太郎一は、1873(明治6)年、弘前藩士吉町官輔の長男として生まれます。1898(明治31)年に東京大学工学部を卒業後、助教授として教鞭をとり、そして翌年教授として赴任した廣井勇に大きな影響を受けます。この出会いは後に旭橋の建設に関係するところとなります。

その後、1901(明治34)～1905(明治38)年はベルリン工科大学に留学して橋梁理論を学びます。帰国直後には創立当初の名古屋高等工業学校(現名古屋工業大学)に赴任し、学校および学部の体制づくりに尽力します。なお、この間に名古屋の納屋橋の設計に携わったとされています。1911(明治44)年には創立まもない九州帝国大学(現九州大学)に赴任し、またもや工学部門の創設に係ります。

1919(大正8)年から北海道帝国大学(現北海道大学)工学部の創設委員として係り、1924(大正13)年工学部開設後は、初代工学部長に就任し、代表的な功績である旭橋はその間に設計されました。

晩年になってからも吉町太郎一の教育者としての挑戦は続き、室蘭工業大学の前身である室蘭高等工業学校の初代学長として同校の基礎を築きました。



白鬚橋(東京都)



納屋橋(名古屋市)

旭橋とその技術

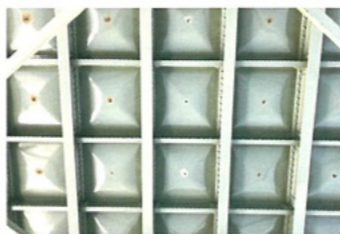
旭橋はブレスト・リブ・バランスド・カンチレバー・タイドアーチという形式で、同形式の橋梁は国内には4橋のみ現存しています(白鬚橋<1931年 東京都>、忠節橋<1948年 岐阜市>、北上大橋<2003年 一関市>)。また北海道開発局が管理する道路橋の中で最も古い橋です。このうち「白鬚橋」は増田 淳の設計であり、増田もまた吉町が影響を受けた廣井 勇に師事しました。二人の恩師たる廣井 勇自身も旧豊平橋(1924年 札幌市)で同形式橋を設計しをており、旭橋、白鬚橋、旧豊平橋は同じ思想と技術の流れを汲んだ橋なのです。

旭橋は当時最新となる技術を活用したことで、80年を超える現在でも、現役の橋梁として利用が可能になっています。『バックルプレート』は、凹型の鋼板を縦桁間に敷設し、その上にコンクリートを打設する構造で、明治期の床版構造で主に鉄道で使用されました。現存する本構造は5橋とされています。

『ロッキングカラム』は、橋桁の温度収縮を吸収するために設置された桁内支承と呼ばれるもので、アーチ機構を確保するため桁両端を固定構造とした旭橋には、必須のシステムでした。床版に使用された『シンダーコンクリート』は、石炭の燃えカスを骨材として練りこむことで



吉町太郎一
(写真:進藤義郎氏蔵)



バックルプレート



ロッキングカラム



井形 淳 設計部 次長 工学博士/技術士(建設部門)

日本の土木構造物には時代を越えて我々の生活の中にとけ込んで、愛され続けるものがあります。そんな構造物の一つである旭橋の設計者にして、日本の橋梁技術と教育行政において有形無形の貢献を果たした偉人を紹介させていただきます。旭川市のシンボルとしてあまりにも有名な旭橋ですが、今年(2018年)は完成後87年を迎え、設計者である吉町太郎一の享年に並ぶ歳となりました。

〈略歴〉

1967年 札幌市生まれ。1993年 室蘭工業大学大学院建設システム工学修了、1996年 室蘭工業大学大学院建設工学修了。北海道開発局開発土木研究所勤務を経て、建設コンサルタント会社に勤務、2015年(株)エーティック 入社

軽量化を計った、元祖「軽量コンクリート」です。これらの技術は関東大震災後に建設された「隅田川5橋」で適用され、旭橋に転用されましたが、現存するのは「旭橋」のみとなっています。



旭橋

旭橋と旭川の歩み

旭橋は石狩川と牛朱別川の合流点に架けられた橋で、川の多い旭川では橋の役割は非常に大きかったと想像します。完成した1932(昭和7)年時、旭川市は周辺町村と合併する前で、今よりずっと小さな都市であり、旭川駅から常磐公園、第7師団庁舎へと通じるルートは市の中央を通る最重要路線で、旭橋は軍都旭川を象徴する橋でした。旭川電気軌道(現在のバス会社)の路面電車が通過しており、戦後も1956(昭和31)年までその役割を果たします。その後、道路橋として役割は変わりますが、今でも旭川市の主要路線のひとつとして橋の役割を果たし続けています。

旭橋は2016(平成28)年に建設84年の橋寿を迎え、ライトアップイベントなどが行われ、吉町太郎一が設計時に思い描いた通り、今や「旭川のシンボルになる橋」となったのです。



ライトアップされた旭橋(写真:北海道開発局所蔵)

教育者としての吉町太郎一

現在、吉町太郎一の功績が構造物として形に残るものは少ないですが、その足跡は研究者、教育者として後進の育成面においてより多く発揮され、後進の技術者達の中に多くのものが受け継がれていると筆者は考えます。

吉町太郎一の胸像は今も北大工学部前に座し、学生たちを静かに見守ってくれています。



吉町太郎一胸像(北海道大学構内)

道内トンネル文献あれこれ (平成30年7月～11月)

専門雑誌等に発表された、北海道内のトンネルに関する論文・報文等のリストを紹介します。トンネル関係者の方々へ最新情報を提供いたします。詳細を知りたい方は弊社までお問い合わせ下さい。

■国道・道道他

- ① 日下敦, 砂金伸治, 北川洋平, 河田皓介, 原翔平: 山岳トンネルの地震時挙動に関する動的計測結果に基づく一考察, トンネル工学論文集, No.28, pp1-17, 2018.
- ② 亀村勝美, 倉橋稔幸, 岡崎健治, 山崎秀策, 村山秀幸, 丹羽廣海: 先進ボーリングによる地山評価とその効果, トンネル工学報告集, No.28, pp1-7, 2018.
- ③ 原翔平, 日下敦, 小出孝明, 砂金伸治: トンネル換気用ジェットファン吊金具の軸力計測に関する一考察, トンネル工学報告集, No.28, pp1-6, 2018.

■新幹線・鉄道

- ④ 古村惇朗, 赤澤正彦, 外山真, 井上佳紀: 電気探査・地化学探査・ボーリング調査を併用して鉱化変質帯の分布を推定—北海道新幹線 内浦トンネル—, トンネルと地下, Vol.49, No.11, pp23-32, 2018.
- ⑤ 玉井達毅, 高根大輔, 中田暁之, 大畑雅義: 多量湧水下でのトンネル掘削における切羽安定化対策, トンネル工学報告集, No.28, pp1-7, 2018.



これまで弊社計測チームは「技術第二部(計測グループ)」として運営しておりましたが、このたび「計測事業室」として生まれ変わります。

「計測」はエーティックが平成6年に社名を変更する前の北日本計測コンサルタント時代(昭和48年創立時)から提供している事業であり、建設コンサルタントの直営部隊として活動していることは業界でも希有な存在となっています。北日本計測コンサルタント時代は丁度トンネル工法の転換期であり、弊社ではNATMでは当たり前となったB計測の機器設置・計測解析が盛んに行われ、そのシェアは全道で100%近くを占め、「トンネル計測と言えばエーティック」と言っていただけになりました。

その他にも大型構造物である橋梁、ダム、ケーソンなどは元より、地すべりなどの地盤変状など多様な計測、解析を行い、社会インフラの安全を支えてまいりました。時代が変わっても正しい計測データを発注者に提供するそのスタイルは過去も今も変わりません。

今後は「計測事業室」として、社内において自由横断的な部署運営を行い、さらに運営の幅と深みを増し、さらなる発展を目指す所存でございますので、改めて宜しくお願い申し上げます。



●弊社は北海道土木技術会に参画しており、多方面にわたり運営に尽力しております。

左 / 北海道土木技術会トンネル研究委員会地方小委員会(小樽地区・札幌地区)主催トンネル見学会(2018.12.4 一般国道5号小樽市塩谷トンネル工事)事務局として運営



対外発表

弊社の対外発表活動を紹介いたします。

調査部 若山技師が3次元地盤モデルの活用に関する対外発表を行いました。

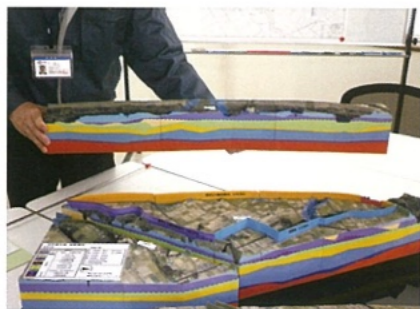
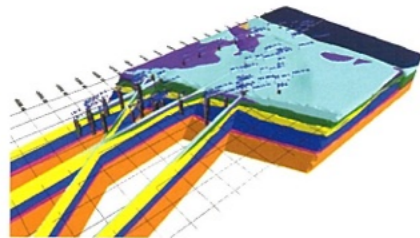
論文名 ▶ 3次元地盤モデルの活用と表現方法に関する事例紹介(全地連技術フォーラム2018 高松)

〈発表者〉 若山大斗(エーティック 調査部) 共同発表者:工藤 忠(エーティック 調査部)

〈概要〉

遊水地事業の地質調査業務において、3次元地盤モデルの作成を行った。本業務における地質調査は多年度に渡り行われており、多数のボーリング調査データが存在するが、層区分が統一されておらず、データの一元化がなされていなかった。そこで、3次元地盤モデル作成にあたり、過去の蓄積された調査データを精査・再整理することにより、地層の再区分を行った。今回作成した3次元地盤モデルに対しては、コンピュータ上でのデータ閲覧にとどまらず、出力方法の一つとして、3Dプリンターによる模型作成を試みた。作成した模型は、代表的な断面を確認可能な状態とするため7分割したほか、周囲提および囲ぎよう提は取り外し可能な形で作成する工夫をした。

今回の3次元地盤モデルの作成を通じて得られた課題は、作成にかかる時間や経費などのリソースが2次元の地質断面図と比較して非常に大きいことや、元となる調査データの密度が地点により異なるため、3次元地盤モデルにおいても精度が一様でないことを利用者に理解してもらう必要があることがあげられる。今後は、更なる3次元地盤モデルの利用拡大が考えられることから、維持管理・施工段階への連携を考慮し、より広い視点での利用方法・活用方法を検討していく必要があると感じた。



今年の4月末で平成の年号が変わりますが、この平成時代に生まれた人たちは「白い雲の浮かぶ青い空」の札幌の冬空光景は当たり前になっていると思います。

その以前(1970年代後半:昭和50年頃)からの札幌では、冬道(積雪路面や凍結路面)の車両走行は、交通安全確保の手段として普及したスパイクタイヤを装着して走るのが一般的で、札幌市の最低気温が氷点下になる11月中旬頃にはスパイクタイヤ装着率がほぼ100%になり、4月の雪解けとともに夏タイヤに履き替えるまで装着しているのが常でありました。このような状況で札幌の冬(11月~4月)は、交通量の増加とともに舗装道路の表面が、車両走行によってタイヤに打ち込んである鋸(スタッド:スパイク)で削り取られ、それが車粉(粉塵)となって空中に舞い上がり浮遊し空一面に拡散して、50~60m先さえ霞んで見え辛くなるほどの大気汚染となり、健康や環境を損なう車粉公害といわれる社会問題になってきました。

この問題は、北海道の中でも交通量が圧倒的に多い札幌市特有の問題で「健康・環境」が「交通安全・経済効率」という相反する事柄が絡み、浮遊粉塵によるじん肺問題、スパイクタイヤによる舗装道路摩耗の補修費急増等さまざまな問題を生み、更に運転手(住民)が加害者であると同時に被害者にもなるという特殊なケースでした。

この車粉公害を克服するには、スパイクタイヤでの装着走行を禁止しなければならず、スパイクタイヤの使用規制に係る具体的施策を策定するために、札幌市は1985(昭和60)年7月「札幌市スパイクタイヤ問題対策審議会(メンバー:学識経験者・道路管理者・交通管理者・市議会議員・交通運輸事業関係者・市民等)」を立ち上げスパイクタイヤの使用規制、内容および条例化について検討を重ねてきました。

1. スタッドレスタイヤの普及促進
 - ・スタッドレスタイヤモニター制度導入(1984~1988年:12.5万人応募・利用)
 - ・スタッドレスタイヤの改良および性能向上
2. 冬道の安全運転教育の充実と徹底
3. 除雪体制の変更と道路融雪・除排雪のレベルアップ
4. 坂道ロードヒーティングの敷設促進

これら上記対策を審議会の最終答申として受けた札幌市は、『札幌の街を車粉から守るためスパイクタイヤの使用を規制する条例』を1987(昭和62)年2月に制定し、同年4月1日から施行しました。

この札幌市の条例が施行された事を契機に、北海道や北海道警察に於いても「脱スパイクタイヤ社会の実現」に向けて、札幌市周辺地域・さらに道内主要都市との連携に後押しとなり、札幌市に流入するスパイクタイヤ装着車両の減少に繋がっていきました。さらに、タイヤメーカーにおいてもスパイクタイヤの製造・販売中止が進み、指定地域内でのスパイクタイヤの使用禁止が加速されました。また、スタッドレスタイヤの改良・性能向上、凍結路面对策(除雪・融雪・ロードヒーティング等)が進み、脱スパイクタイヤ運動にさらなる弾みがつき、スパイクタイヤ装着車両が大幅に減少し、車粉(粉塵)による大気汚染が飛躍的に改善されてきました。

現在、皆さん方が見ている札幌の冬空光景、当たり前になっている清々しい空気は、上述のような困難な問題を抱え、その問題の顕在化から解決までさまざまな組織・機関等によって行われた協働活動の10年以上にわたる継続展開で得た結果であります。

札幌で生活していて「清々しい空気」を感じた時、先人達が困難な問題に立ち向かい『青い空』を取り戻してくれたことを思い出し・語り継いで頂ければ幸いです。

筆者は、1986(昭和61)年4月から札幌市建設局土木部土木技術センター所長として「札幌市スパイクタイヤ問題対策審議会」の第2専門部会(冬季路面管理およびスタッドレスタイヤ普及について)で冬季路面管理について関わっていました。



スパイクタイヤ規制開始(1990年3月)



スパイクタイヤ禁止横断幕(1992年2月) 車粉でくもる札幌の街並み(1984年9月)



志部谷 一男 営業企画部 担当部長

〈略歴〉

1944年 札幌市生まれ
69年 室蘭工業大学 土木工学科卒業、同年 札幌市に就職、建設局土木部・鉄道高架部に所属し、橋梁新設工事の設計・施工監督、国鉄(JR)の連続立体交差事業等の都市基盤整備に携わる
86年 建設局土木技術センターで「スパイクタイヤ問題の解決」に向けて、融雪技術の研究開発に取り組む。その後 総務局国際部(札幌国際プラザ出向)、財政局監査室を経て、手稲区土木部を最後に2004年退職(同年 設計コンサルタント会社に就職)
2014年(株)エーティック入社

北海道胆振東部地震ーお見舞いと災害支援

平成30年9月6日未明に発生した「北海道胆振東部地震」により犠牲になられた方々にご遺族の皆様にご心よりお悔やみを申し上げますとともに、被害に遭われた皆様に謹んでお見舞いを申し上げます。

弊社では現在、被害が生じた札幌市、厚真町、安平町、北広島市等被災地の復興に向けて、建設コンサルタントとして災害復旧業務に取り組んでおります。

本社社屋を構える札幌市西区二十四軒では地震発生直後から7日の夜まで停電が続き、周辺のマンション等では停電による断水になったご家庭が多数ありました。また携帯電話の充電などができず、困った方も多くいらっしゃいました。弊社では災害対応の為に出勤していた数名により、発電機を稼働させ社屋正面玄関にコンセントを用意し充電スペースとして開放、また屋外の散水栓で水の提供もさせていただくなど微力ながら周辺住民の方々へのお手伝いをさせていただきました。6、7日の2日間で電気を求める方約50人、水を求める方約100人が足を運ばれました。電力が回復した後に沢山の方々から、「あの時は助かったよ！ありがとう！」と声を掛けて頂き、励みと自信になりました。今後もこのような形で近隣住民の方をはじめ、地域社会に貢献できるよう努めたいと思います。



株式会社エーティック 函館支店の開所式を行いました

平成30年4月に開設した函館支店は11月7日、仮事務所から新事務所へ移転を完了し、神主様に御祈りいただき、神棚へ御神体をお奉りする“事務所開き”を執り行いました。新事務所は新函館北斗駅より車で5分ほど、お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。

【函館支店】

〒041-1101
亀田郡七飯町字仁山255-2
Tel. 0138-78-1104
Fax. 050-3730-4847



UAVの飛行許可・承認取得について

弊社は11月8日に東京航空局より無人航空機(UAV)の飛行許可・承認を取得しました。これによりドローン・マルチコプターによる日本全国の空中写真撮影が可能です。



エーティックTシャツを作りました!

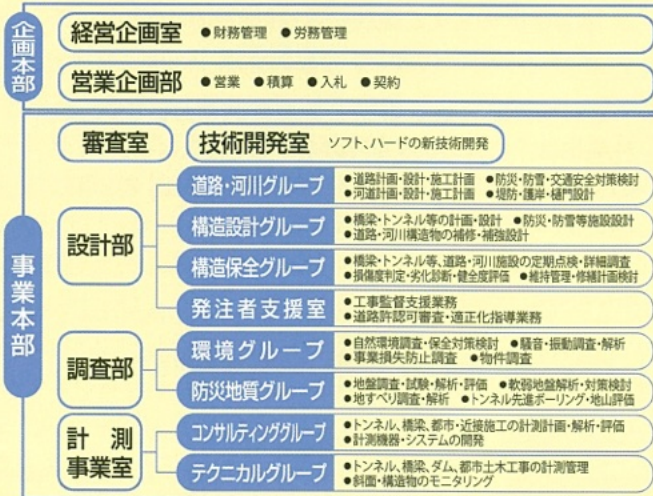
45周年記念事業に合わせて、エーティックのTシャツを作りました。イベント開催時には社員みんなで着用しています。腰にプリントされた弊社ゆるキャラの[エーさんとティックくん]がポイントです。



株式会社 エーティック 会社概要

- 商号 株式会社エーティック
- 代表者 代表取締役社長 舟田 幸太郎
- 所在地 〈本社〉札幌市西区二十四軒1条5丁目6番1号
- 創業 昭和48年1月31日
- 資本金 48,000千円
- 従業員 96名
- 事業所 札幌本社 東京支店 函館支店 道央営業所 旭川営業所
- 表彰 平成25年 北海道開発局函館開発建設部 優良工事・業務表彰受賞
空知総合振興局札幌建設管理部 優秀現場代理人・管理技術者表彰受賞
平成28年 北海道開発局札幌開発建設部 優良工事等表彰受賞
平成29年 札幌市建設局土木部所管工事に係る設計等優秀履行業者表彰受賞
北海道開発局網走開発建設部 優良工事等表彰受賞
平成30年 北海道開発局室蘭開発建設部 優良工事等表彰受賞

組織図



編集後記

お正月を迎える度に大掃除をしなきゃと思い、計画を立てますが、いざ始めると、ここも気になる、あそこも気になる・・・と、なかなか計画通りにはいきません。また去年は全国的に自然災害が多く、大掃除をしながら防災グッズの確認をされた方も多いのではないのでしょうか。今年は備えを万全に、安全第一で1年を過ごせますように。本年もよろしくお祈りします。

広報委員会 広報誌部会 エーティック女性社員一同